

卒業生シンポジストに聞く コミ福での学びと現在の仕事

大夔賀 政昭

(まなびあい運営委員/コミュニティ福祉学科2004年卒業)

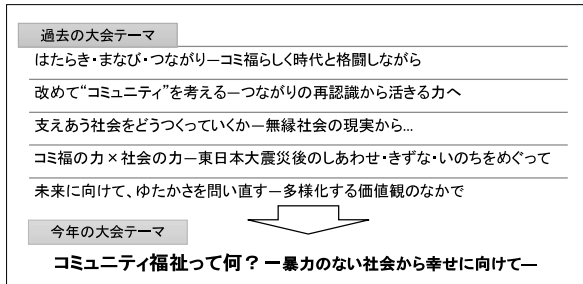


■ シンポジウム企画意図と概要について

昨年度の年次大会において、まなびあい運営委員会で企画したシンポジウム「卒業生シンポジストに聞くコミ福での学びと現在の仕事」を実施しました。シンポジウムの様子については、逐語録を本誌にそのまま掲載しておりますので、シンポジウム企画意図と概要について簡単に報告させていただきます。

このシンポジウムは、まなびあい運営委員会で昨年度年次大会のテーマである『「コミュニティ福祉」って何?』ということを考えるために企画されたものです(これまでの年次大会のテーマについては、以下のスライドを参照)。

シンポジウム実施の背景として、現在コミュニティ福祉学部は、福祉学科、政策学科、スポーツウエルネス学科の3学科



ですが、1998年開設当初は、1学科でした。その後2学科時代を経て、現在に至りますが、その間新座キャンパスも、現代心理学部ができたりと大きく変わってきました。

そのような中で、同じ「コミュニティ福祉学部」卒業生といっても背景が大きく異なることが散見され、まなびあいの活動をするにあたって、その範囲の広さに共通項を見出しにくくなっている状況があります。また、設立当初メインターゲットであった卒業生の大会参加が年々減少している状況にあります。

そこで、卒業生を主役にした企画を行うとともに、卒業生にコミュニティ福祉学部について改めて語ってもらい、参加者全員でその内容を共有することにより、多様化しつつある「コミュニティ福祉」「コミュニティ福祉学部」についての共通認識を深めるシンポジウムを実施することとしました。

具体的には、1998年の学部創設から現在に至るまでのコミュニティ福祉部の歴史を振り返ることによって、改めて「コミュニティ福祉」を考える契機を提供しようという意図のもとに、大きく二つのセッションがシンポジウムにおいて実施されました。

一つ目は、学部長を務められた経験をお持ちの福山先生、そしてシンポジウム実施時に学部長を務めておられた松尾先生をお呼びし、在任時のコミュニティ福祉学部の様子をお聞きするというセッションを実施しました。

特に福山先生には、コミュニティ福祉学部創設する際の準備に関わっておられたということで、そもそもどのような経緯でコミュニティ福祉学部ができたのかということもお伺いしました。

二つ目のセッションは、シンポジウムのタイトルにあるようにコミュニティ福祉学部の「卒業生」にお越しいただき、コミュニティ福祉学部在学当時を振り返ってどのような学びがあったかを振り返っていただき、それが現在の仕事にどのようにつながっているのかを話していただくというものです。このような意図のシンポジウムは、卒業生の経験を今のコミュニティ福祉学部の現役生や先生方に還元するという意図があり、卒業生・現役生・教員の先生方の相互の学びを得るといったまなびあいの主旨にそった内容であるため、過去にも数回実施されています。

今回は、現在コミュニティ福祉学部が、福祉学科、コミュニティ政策学科、スポーツウエルネス学科と3学科に分かれているため、それぞれの学科から1名ずつ、そして学科が分かれる前（1998年～2005年）に在学されていた方を代表して1名、計4名の方をシンポジストとしてお呼びしました。

これまでの卒業生を呼んでのシンポジウムと異なる特色としてコミュニティ福祉学部が複数の学科に分かれる前と現在で変わっているか、また各学科で学びの特色はあるか、といったことも考える点があげられると思います。今回は、次のスライドのようなスケジュールでシンポジウムを実施しました。

シンポジウムの概要

時間	内 容
13:30～13:45 (15分)	・趣旨説明／シンポジスト紹介
13:45～14:30 (30～45分)	【セッション1】 学部長への質問 在任時のコミ福の様子、学部変遷過程における意図、等
14:30～15:20 (50分)	【セッション2】 シンポジストへ質問 今の仕事について、当時のまなびと今の仕事はどうつながっているか？ <ul style="list-style-type: none"> ■ 今の仕事の概要／今の仕事を志望した経緯 ■ 当時のコミ福・キャンパスの様子、学部内外との交流 ■ 私が感銘を受けたor仕事につながっている授業・カリキュラム ■ 当時のまなびを振り返り、あったらよかったと思う授業・カリキュラム
15:20～15:30 (10分)	・フロアとのやりとり／まとめ

■ シンポジウムを実施してみて

今回、まなびあい運営委員として、シンポジウムの企画立案に携わり、また当日コーディネータを務めてみて感じたことは、学部長を務めておられた先生方からコミュニティ福祉学部創設の経緯、学部再編過程における意図を伺えたことは現役生や卒業生を含めて、学生という立場からは決して知ることが出来なかったであろうと思いますので、大変貴重な経験になったということです。

また、多くのみなさまの協力を得て、4人もの出身学科が異なるシンポジストをお呼びして、その経験を学部長の先生とともに伺ったことにより、コミュニティ福祉学部における教育の特色を改めて感じる事ができたと思います。

詳細は、この後に記載されているシンポジウムの逐語録をお読みいただければと思います。

私は、シンポジウムのやり取りから、「命の尊厳のために」というスローガンの元に展開される人間そのものに関わる総合学を目指す試みは、コミュニティ福祉学部としての理念としていつの時代にも通底しているということを感じました。そして、いわゆるコミ福らしさとしての教員と生徒の近さ、実践的教育の志向という文化は、学部が3学科に分かれた現在も変わらず受け継がれており、そのために先生方も努力しているということも感じました。

また、時間が十分に取れなかったのが悔やまれますが、卒業生シンポジストと、いろいろな質問のやりとりをする中で、その多様なキャリアや当時の学びを伺うことができました。この内容は、現役生にとっては、社会に出ている卒業生の経験を聞くという貴重な経験になったものと思います。今後ともこのような卒業生のキャリアと当時の学びを伺う機会を作っていきたいと考えています。

一方で、コミュニティ福祉学部が3学科体制となり、コミュニティ福祉での学びが専門分化される中で、学生のまなびを支援するための学部の運営の改革やカリキュラムを再構成が行われてきたということも知りえることができない貴重な機会になりました。

特に専門科目と一般教養科目のバランスというテーマについては、1学科体制であった当時（1998年～2005年）と比較すると、確かに現在のカリキュラムにおいては、学科を越えて学べる専門の科目の領域は狭まっているかもしれません。しかしながら、現在のカリキュラムにおいては、低い学年から専門的な科目が選択できるように工夫されているとともに、社会に出てから主体的に学べるように、一般教養科目の工夫がなされているということがわかりました。どちらがよいかということは判断できませんが、これがそれぞれの時代の教育の特徴の一つとしてあげられるのではないと思いました。

他方、シンポジウムで提供されたコミュニティ福祉学部の現在に関する情報は、卒業生にとっては知らないことが多く、刺激が大きかったのではないかと思います。このような情報もまなびあいの活動を通して卒業生に伝えることが重要であると感じました。

最後に、今回のシンポジウムは年次大会のテーマである「コミュニティ福祉って何？」ということを実行問うために実施したものでしたが、何よりコミュニティ福祉学部に関わる関係者がコミュニティ福祉に関わるまなびについて改めて考え、コミュニティ福祉学部とは何かということ、卒業生、現役生、教員の先生方の三者で語り合える場ができたということにおいて、とても重要であったと思います。

まなびあいという組織をプラットフォームとして、このような三者による学びの場が、今後とも継続的に作られていくことを願っています。